

学校だより
「まんだ」
No.10

自他を大事にする子供 学び続ける子供 共に未来を切り拓く子供



認める力

やりぬく力

表現する力

体験を通して自覚する

5年生が、朝から玄関前を掃除してくれています。これから冬にかけて、落ち葉の季節になるのでありがたいことです。もっと嬉しいのが、掃除をしている子供たちの表情が明るく穏やかであることです。万田小の一員として学校を大事にしているという自負、落ち葉を掃きながら、先生や友達との他愛のない会話をする喜び、そして、登校してくる下学年に「おはようございます」と声をかけつつ感じているであろう自らの成長。体験を通していろいろなことを感じとり、それが高学年としての自覚になっていくのだらうと思いました。



6年生が、万田坑ガイドをしています。前は、3年生をお客さんにガイドしましたが、今回は、八幡小の6年生に万田坑ガイドをしました。前回よりも慣れているはずなのに、今回はなんだか遠慮がちです。おそろおそろ説明しているといった感じです。でも、それは当たり前。相手が違うんですから。「自分が3年生にわかりやすく説明しよう。」という積極的な気持ちから、「自分のことを八幡小の人たちはどう思うだろう。」という消極的な気持ちが強くなるのは自然なことです。でも、人間、消極的な気持ちの時に、自らを深く見つめていると思うのです。6年生も体験を通して自覚を高めているのだと思いました。



体験を通して…やるせない

1年生がたくさん荷物を抱えて登校しています。その荷物の中に、虫かごがありました。見ると、カマキリが1匹入っています。「家で捕まえたの？」と聞くと、それには答えず、「前捕まえとったカマキリは死んだ。食べられた」と言います。とすると、共食いか？きっとショックだったのでしょう。カマキリの運命とは言え、やるせない気持ちになります。

見ると、ほかにも虫かごを持って登校する1年生がいます。子供は、宝物として学校に持って行っているのでしょうか、虫かごと揺さぶられる虫にとっては災難です。カマキリが恨めしそうに、私を見ています。「カマキリってかっこいいよね。校長先生、虫が大好きなんだよ。だから大事に育てて、あとで逃がしてあげるといいね。」と言いました。

今日は、生活科か何かで、虫取りをするのでしょうか？あのカマキリの運命やいかに！

「やるせない」と言えば、4年生の国語で勉強する「ごんぎつね」。兵十に撃たれたごんがやるせないのではなく、ごんを撃ってしまった兵十がやるせないのです。そして、それを客観的に見ているはずの読者がやるせない気持ちになります。

先日、4年3組で「ごんぎつね」の研究授業がありました。「本当は、ごんは寂しかったと思います。」「本当は、ごんは優しいきつねだと思います。」などと、子供たちは言います。

「本当は…」というのは、見えている現象ではなく、見えないはずの「こころ」だ。と、子供たちは言っているのだと思いました。

体験を通して、やるせないという気持ちを理解し、物語の登場人物に共感する「こころ」を成長させているのだと思いました。



体験積み重ねて自信を持つ

10月3日、三角小学校の6年生を招いて、本校の6年生が万田坑ガイドを行いました。今回は、県内各市町村の教育長の先生方が20名ほど視察にいらっしゃいました。これまで長年教育に携わってこられた教育行政のトップの先生方を前に、自信をもってガイドしていました。

